

第一章

テンス・アスペクトに関する一般的論議

1. テンス・アスペクトの定義

テンス(TENSE・時制)という範疇とアスペクト(ASPECT・相)という範疇はいずれも時間に関係するという点では類似している。しかし、それぞれの時間に関係するしかたが異なるため、はっきりと区別して理解する必要がある。

本稿では、日韓両言語のアスペクト体系に関する対照を行うことを主な目的とする。しかし、現代韓国語に関する先行研究では、テンス・アスペクトに関する定義が、研究者の立場によって異なる場合がしばしば見られる。^{*1} そのため、本稿で試みている比較対照研究の対象を明確に示すとともに、その対象を選び出した基準についても明確に示す必要がある。以下では、本稿で用いる「テンス」「アスペクト」「文法化」という用語について定義を行い、本稿で取りあげる日韓両言語の「テンス・アスペクトを表す形式」を示す。

1.1. テンス

1.1.1 定義

テンスには「発話時と出来事時との外的関係をとらえるテンス(絶対テンス)」と「発話時と参照時との外的関係をとらえるテンス(以下では、参照時テンスと呼ぶ)」がある。絶対テンスについては、Comrie(1976)にならい、次のように定義する(以下では、絶対テンスを単にテンスと記すことにするが、「参照時テンス」と区別する必要がある場合は、その都度明記する)。

(1) Comrie (1976, pp. 1-2)

Tense relates the time of the situation referred to some other time, usually to the moment of speaking.

*1 南基心(1972)等では、韓国語には時制という範疇は認められず、相だけが存在すると主張する。一方、金錫得(1974)、徐正洙(1976)等では、時制と相を区別せず、両者が未分化した「時相(tense-aspect)」という範疇を設けている。また、金次均(1980a)では、時制が存在するのみであると主張する。このように、同じ「時制」「相」「時相」などという用語も研究者によってその意味するところが異なる場合がある。

(テンスは、さしだされた場面 situation の時間をべつの時間に、ふつうは発話の瞬間 moment に関係づける。山田小枝訳(1988), p. 10)

Since tense locates the time of situation relative to the situation of the utterance, we may describe tense as deictic.

(テンスは、発話の場面との関係において、場面の時間を位置づけるので、指示的 deictic である、ということができる。同書 p. 10)

(2) Comrie (1985, p.9)

... tense is grammaticalised expression of location in time.

(テンスは、時間の中における(状況の)位置関係に関する文法的な表現である。安訳)

「テンス」とは、話し手がある場面(Situation)を述べる際に、場面を構成する運動や状態が、発話時(Speech Time)を基準として時間的にどういう位置にあるかということ(つまり発話時と「さしだされた場面」の時間との外的関係—この意味で指示的(deictic)—)を示すための文法的なカテゴリーである。特に、運動を表す場面だけに注目すると、発話時と出来事時との外的関係をとらえる文法的カテゴリーということになる。次の例を見られたい。

(3)a 私、博士論文を書くわよ。

b 私、博士論文を書いたわよ。

(4)a 太郎が博士論文を書いているよ。

b 太郎が博士論文を書いていたよ。

(3)a と(4)a の「書く」と「書いている」は、発話時を基準にして、発話時以後(「書く」)に、あるいは、発話時と同時(「書いている」)に運動及び状態が存在するということを示している。これに対し、(3)b と(4)b の「書いた」と「書いていた」は、発話時を基準にして、発話時以前に、運動及び状態が存在するということを示している。^{*2}

このように、例えば、現代日本語の「スル(シテイル)↔シタ(シテイタ)」という文法的な形によって示される運動及び状態を、発話時を基準にして、以前(=過去)に位置づけるか、同時(=現在)に位置づけるか、以後(=未来)に位

*2 本稿では、相対テンス(主文の述部が示す時点を基準にして、その前後関係を述べる)については言及しない。

置づけるか、という対立がテンス(絶対テンス)である。

1.1.2 いわゆる「完了(perfect)」とテンス³⁾

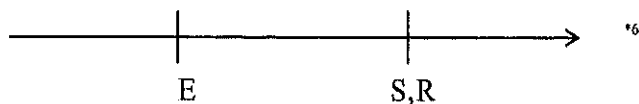
一方で、「発話時」と「参照時」との外的関係をテンスとしてとらえる場合がある(参照時テンス)。ライヘンバッハ(Reichenbach, H.)は、動詞の時制論(The Tenses of Verbs)の中で「発話時」と並んで「参照時」を想定している。⁴⁾ライヘンバッハは、「発話時」と「出来事時」だけでは、「完了(perfect)」と「過去(simple past)」を区別することができないことから「参照時」を設けることによって、この問題を解決しようとしている。⁵⁾

ここでは、工藤(1989)の用語の「パーフェクト」を理解するためにも欠かせないと思われる「過去(simple past)」と「現在完了(present perfect)」の区別の例を詳しく取りあげる—「現在完了(工藤(1989)のパーフェクト)」をテンスとして取り扱うという意味ではなく、「過去(絶対テンス)」との関連について述べる。日本語のパーフェクト的な表現と韓国語に関する具体的な対照は第三章と第四章で行う。

Simple Past (I saw John.)



Present Perfect (I have seen John.)



*3 「完了(perfect)」については、後述する。

*4 ライヘンバッハ(1947)『The Tenses of Verbs』『Elements of Symbolic Logics』(pp. 287-298)

*5 「発話時」「参照時」「出来事時」については、ライヘンバッハ(1947, p. 290)を参考にしている。

'S'; 'point of speech' / 'R'; 'point of reference' / 'E'; 'point of event'

'S'; 「発話の時点」 / 'R'; 「言及の時点」 / 'E'; 「事象の(起きた)時点」(石本新訳(1982) p. 301)

*6 ライヘンバッハ(1947, p. 290)からの再掲である。

ライヘンバッハは、上の図から、R の時点を設定しないことにすると「過去」と「現在完了」は、以下に示す図のようになってしまい、両方を区別することができなくなる、と主張する。



絶対テンスの観点から考えてみると「現在完了」は、発話時より出来事時が先行するので、「過去」になってしまう。それでは、「現在完了」は何を基準にして「現在」なのか、ということが当然問題になる。ライヘンバッハは、この問題について、「発話時」と「参照時」との外的関係をテンスとしてとらえることによって一つまり、S と R の外的関係一解決している。この説明によると「現在完了」は、S と R が同時であるから「現在」ということになる。このように「S と R の外的関係をとらえるテンス(参照時テンス)」は、「S と E の外的関係をとらえるテンス(絶対テンス)」とは、いかなる時を「基準時」とするかという点において異なる。

「現在完了」の表す意味の中核的な部分は、「過去において生じた出来事を現在に結びつける (current relevance)」という点にあり、現在完了という語が示しているように、現在完了は現在時制の一種である。現在完了が現在時制の一つであることは、以下のような時を表す副詞(句)との共起関係からも確認することができる。例えば、次のような例がある。

- (5) Father has already gone to the office.
(父はもう事務所に行ってしまった。)
- (6) I have just been to the post office.
(私はちょうど郵便局へ行って来たところです。)
- (7) Have you ever been to Korea?
(あなたは韓国へ行ったことがありますか。)
- (8) Where have you been all this week?
(今週ずっと君はどこに行っていたの?)
- (9) I haven't seen her up to now.
(私は今まで彼女に会ったことはありません。)

「現在完了」は、(5)から(8)に示したように「already, just, now, ever, all this week, up to now」など、過去と現在にまたがる時を表す副詞(句)とともに用い

ることが可能である。これに対し、明らかに過去の時を表す副詞(句)とは、共起しない。次の例を見られたい。

(10) I wrote five letters *this morning*.

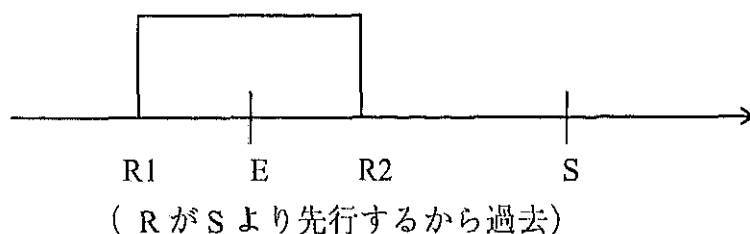
(私は今朝手紙を 5 通書いた。)

(11) I have written five letters *this morning*.

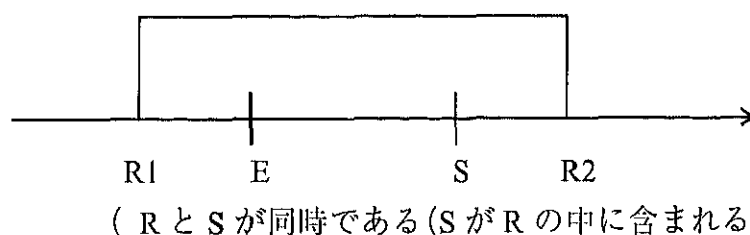
(私は今朝手紙を 5 通書いた。)

例えば(11)は、(述語が現在完了形(have written)であり、同一文中に、明らかに過去の時を表す時間成分(this morning)があっても)手紙をもう書き終えて午前中に言っている文であれば文法的である。(11)のような文脈における「this morning(今朝)」は、過去と現在にまたがる時を表す副詞句として機能している。一方、過去形が用いられている(10)については、発話時が「午後になっている」ことが含意される。(10)における「this morning(今朝)」は明らかに過去の時を表す副詞句として機能している。これを図で示してみると、以下のようなになる。

(10)' R1 → R2 : this morning(今朝)



(11)' R1 → R2 : this morning(今朝)



(10)と(11)に関する重要なポイントは、発話時より前に起きた出来事と発話時現在との関連性(current relevance)の違いである。(10)'と(11)'に示したように、現代英語のような言語の場合は、当該の発話内容が、発話時より前に起きた出来事と発話時現在とを関連づけていれば、現在完了形(have written)が用いられるのに対し、関連づけなければ(明らかに発話時から切り離された出来

事であれば)、過去形(wrote)が用いられるということになる。(11)のような例は、*this morning* 等の時間表現が指し示す時間帯の中に「発話時」が含まれることによって発話時より前に起きた出来事と発話時現在とが関連づけられることになる。

以上では、テンスについては、いかなる時を「基準時」とするかによって、「絶対テンス」と「SとRの外的関係をとらえるテンス」という二種類として区別することができると述べた。

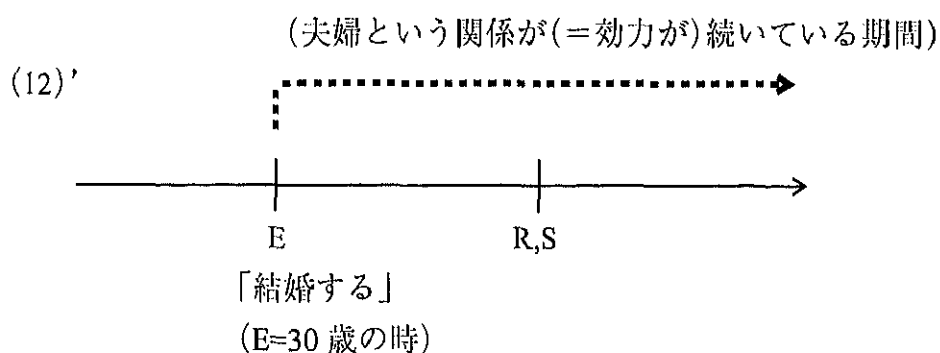
次は、このような区別が、現代日本語と現代韓国語においてどのように関連しているかについて説明する。以下の例を見られたい。

(12) 私は、家内と三十歳の時に結婚しています。

(13) この一年で随分、家がふえましたねえ。

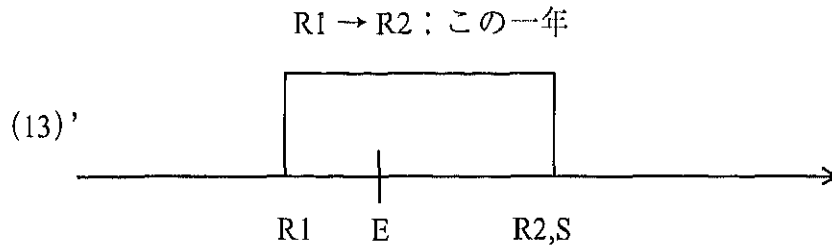
(12)(13)は、工藤(1989)でいう「動作パーフェクト」であり、いわゆる「現在パーフェクト」と呼ばれる例である。^{*}

現代日本語の場合は、「三十歳の時」のような、明らかに過去を表す時間成分が「現在完了」的な表現と共起可能であるが、同一文中に「三十歳の時」のような過去を表す時間成分があっても、発話時より前に起きた出来事と発話時現在とが関連づけられるのは、英語等とは異なる点である。



((12)'の点線で示されている矢印は、発話時より前に起きた出来事(結婚)によってもたらされた効力が、発話時にも有効である(発話時にも夫婦であること=発話時と結びつけられている)ことを示す)

*7 「パーフェクト」については、後述する。



(上の図では、E について、便宜上「点」で表しているが、当然時間的な幅を持つ出来事である)

前述したように、(12)や(13)が「現在(パーフェクト)」を表すという意味は絶対テンス的な意味での「現在」ではない。これは、(12)で言えば、同一文中に「30 歳の時」という過去の特定時を表す「時を表す時間成分」が共起していることから確認することができる。(12)(13)のような文は、R が S と同時であるという意味において現在であり、先行する(過去に起きた)出来事によってもたらされた結果・効力が現在まで続いている(現在と関連づけられる)、という意味的特徴を示す。

繰り返して述べているように、現代日本語の場合は(12)のように、パーフェクトを表す文中に「出来事時」をはっきりと指定することができるのに対し、英語の場合は(14)のように表現することは不可能であるという点には注意しなければならない。

- (14) * I have got up at five o'clock this morning.
(私は今朝 5 時に起きている。)

英語の完了形の場合は、基本的に(明らかに過去を表す)出来事時点を明示する形式と共起しない、あるいは、しにくいこと(特に現在完了においては)が指摘されている。^{*8}

次は、「現在完了」をめぐって、現代韓国語との関連について説明する。

- (15) 나는 아내와 서른살에 결혼했습니다.
na-nun anay-wa selunsal-ey kyelhonhay-ss-supnita
僕 は 家内 と 30 歳 に 結婚する タマス
僕は家内と 30 歳の時に結婚しています。

*8 Comrie(1976)による。(p. 54)

(16) (今、目の前にある脚の傷について語る場面)

어제 시합에서 발을 다쳤습니다.

ecey sihap-eyse pal-ul tach yess-supnita (tachi-ess-ta>tachyess-ta)

昨日 試合で 脚 を怪我するタ ます

昨日の試合で脚を怪我しています。

(15)は、先行する出来事によってもたらされた結果・効力が発話時現在まで続いているという意味(家内と30歳の時に結婚し、現在に至っている)で「現在の状態」を表す例である。(16)も(15)と同様である。詳しい内容については後述する(第四章)が、先行研究では「現在の状態」を表すのになぜ「hayss-ta(했다)」形(現代日本語の「シタ」形に相当する)が用いられ得るのか、という点についてあまり注目されていない。李南淳(1981)と韓東完(1986)では、(15)のような文に用いられる「hayss-ta(했다)」形が「現在の状態」を表す理由について、現代日本語の(12)や(13)のような文と同様に、つまり(12)のような現在完了的に説明している。結婚したのは明らかに過去の出来事であり、絶対テンス的には過去になるが、文全体の意味が決して過去の意味ではないからである。李南淳(1981)は、このような「hayss-ta」が表す「完了」の意味は、動詞の特性によって現れる文脈的な意味にすぎないとしており、韓東完(1986)は、現在の状態からその状態を引き起こした出来事が類推できるとしている。簡単に言えば、「語用論的な意味」として説明しようとする立場である。本稿では、「現在の状態」を表す「hayss-ta」もアスペクト形式として認めている(第四章)ので、これらの立場とは異なる。

最後に、現代韓国語に関しては一つ注意しなければならない点があることについて付言しておく。(12)や(13)及び(15)や(16)のような文を、英語の「現在完了」的に説明することに対し、このような説明は部分的な説明にしかないということである。「現在完了」的な説明を試みても、やはり説明できない例が残ってしまうからである。⁹ 次のような例を見られたい。

(17) 다로는 아버지를 닮았다.

talo-nun apeci -lul talm-ass-ta

太郎は お父さん を似るタ

太郎はお父さんに似ている。

*9 現代日本語の「パーフェクト」に関しても、岩崎(2000)のような反論がある。

(18) A는 팔이 약간 휘었다.

A-nun phal-i yakkan hwi -ess-ta

Aは腕が少し曲がるタ

Aは腕が少し曲がっている。

(17)や(18)は、単純状態を表すという意味で「現在の状態」を表す例である。しかし、(17)や(18)については、(15)とは違って先行する出来事を想定することが不可能であり、「現在完了」的な解釈が困難に思われる。

(19) *나는 아내와 서른살에 결혼해 있습니다.

na-nun anay-wa selunsal-ey kyelhon hay iss-supnita

僕は家内と30歳に結婚するテイルます

僕は家内と三十歳の時結婚しています。

(20) *어제 시험에서 발을 다쳐 있습니다.

ecey sihap-eyse pal-ul tach ye iss-supnita (tachi-e iss-ta>tachye iss-ta)

昨日 試合で 脚を怪我するテイルます

昨日の試合で脚を怪我しています。

(15)(16)については重要なポイントがもう一つある。(19)(20)に示したように「hay iss-ta(해 있다)」形(現代日本語の「シテイル」形に相当する)が成立しない点である。工藤(1989)でいう「動作パーフェクト」を表す例であるが、「hayss-ta(했다)」(現代日本語の「シタ」にあたる)形だけが成立する。現代日本語は「シテイル」形で表すのとは対照的である。第三章と第四章では、日韓両言語には、なぜこのような違いがあるかという問題について検討する。

1.2. 現代韓国語におけるテンスを表す形式

(21)a 오늘은 일요일이다.

[i-ϕ-ta]

onul-un ilyoil -ita

今日は日曜日だ

今日は日曜日だ。

b 어제는 토요일이었다.

[i-ess-ta]

ecey-nun thoyoil -i-ess-ta

昨日は土曜日だタ

昨日は土曜日だった。

- (22)a 오늘은 굉장히 덥다. [tep-ϕ-ta]
 onul-un koyngcanghi tep-ta
 今日は非常に暑い
 今日は非常に暑い。
- b 어제는 굉장히 더웠다. [tep-ess-ta>tewess-ta]
 ecey-nun koyngcanghi tewess-ta
 昨日は非常に暑いタ
 昨日は非常に暑かった。
- (23)a 오늘은 연구실이 깨끗하다. [kkaykkusha-ϕ-ta]
 onul-un yenkwusil-i kkaykkusha-ta
 今日は研究室がきれいだ
 今日は研究室がきれいだ。
- b 어제는 연구실이 깨끗했다. [kkaykkusha-ess-ta>kkaykkushayss-ta]
 ecey-nun yenkwusil-i kkaykkushay-ss-ta
 昨日は研究室がきれいだタ
 昨日は研究室がきれいだった。
- (24)a 오늘은 일요일이지만, 학교에 간다. [ka-ϕ-n-ta]
 onul-un ilyoil -iciman hakkyo-ey ka-n-ta
 今日は日曜日だが学校に行く
 今日は日曜日だが、学校に行く。
- b 어제는 일요일이었지만, 학교에 갔다. [ka-ass-ta>ka-ss-ta]
 ecey-nun ilyoil -i-ess-ciman hakkyo-ey ka -ss-ta
 昨日は日曜日だタが学校に行くタ
 昨日は日曜日だったが、学校に行った。

(21)は「名詞+ ita(이다; 現代日本語の「ダ」「デアル」に相当する)」構文である。(22)と(23)は、形容詞述語構文であり、(24)は、動詞述語構文である。(21)から(24)までの各 a の文は、絶対テンス的に、現在もしくは非過去を表す。これに対し、各 b の文は、過去を表す。(21)から(24)の各々の b から分かるように、これらの例に共通する過去を表す形態といえは「-ess(였)-」である。もっと正確にいえば、「ϕ」と「-ess-」が「非過去」と「過去」を対立を示す、ということになる。本稿の考察の対象である動詞に注目してみると、現代韓国語の場合は、「han-ta(한다)」(現代日本語の「スル」に相当する)形と「hayss-ta(했다)」(現代日本語の「シタ」に相当する)形が「非過去」と「過去」の対立を示す(「動詞語幹-ϕ-nu-ta」と「動詞-ess-ta」の対立)

- 20 -

(27)b * 오늘은 굉장히 덥는다. (形容詞)

onul-un koyngcanghi tep-nun-ta

今日は 非常に 暑い

(訳文省略)

c * 오늘은 연구실이 깨끗하다. (日本語の形容動詞文に相当する)

onul-un yenkwusil-i kkaykkusha-n-ta

今日は 研究室 が きれいだ

(訳文省略)

現代日本語の「シテイル」構文に相当する、「hako iss-ta(하고 있다)」及び「hay iss-ta(해 있다)」(動詞に「-ko iss-ta」と「-e iss-ta」の下接した構文成分(以下「hako iss-ta」「hay iss-ta」と示す))構文も、一部の例外はあるものの(第二章で詳しく述べる)、一般的に(28)bのような「-nu-ta(는다)」形は成立しない。(28)cは、(28)aの過去形である。

(28)a 마당에 지렁이가 죽어 있다.

matang-ey cilengi -ka cwuk -e iss-ta

庭 に ミミズが 死ぬ テイル

庭にミミズが死んでいる。

b * 마당에 지렁이가 죽어 있는다.

matang-ey cilengi -ka cwuk -e iss-nun-ta

庭 に ミミズが 死ぬ テイル

(訳文省略)

c 마당에 지렁이가 죽어 있었다.

matang-ey cilengi -ka cwuk -e iss -ess-ta

庭 に ミミズ가 死ぬ 테일 타

庭にミミズが死んでいた。

以上の内容をまとめると、次のようになる。テンスには、いかなる時を「基準時」にするかによって、二つのタイプが考えられる。一つは「発話時と出来事時との外的関係」をとらえる「絶対テンス」であり、もう一つは「発話時と参照時との外的関係」をとらえる「参照時テンス」である。

日韓両言語におけるテンスを表す形式(動詞述語の場合)をまとめてみると、次のようになる。

現代日本語：

非 過 去	過 去
「スル」	「シタ」
「シテイル」	「シテイタ」

現代韓国語

非 過 去	過 去
「han-ta(한다)」	「hayss-ta(했다)」
「hayss-ta(했다)」	「hayss-ess-ta(했었다)」 ^{*11}
「hako iss-ta(하고 있다)」	「ha-ko iss-ess-ta(하고 있었다)」
「hay iss-ta(해 있다)」	「hay iss-ess-ta(해 있었다)」

1.3. アスペクト

1.3.1 定義

本稿では、Comrie (1976)の(29)のような定義にならい、「アスペクト」について「運動の内的な時間的構成をとらえる(把握する)仕方を表す文法的なカテゴリーである」と定義する。^{*12}

(29) Comrie (1976, p.3)

As the general definition of aspect, we may take the fomulation that 'aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation'. (アスペクトの一般的な定義としては、「アスペクトは場面の内的な時間構成をとらえる、さまざまなし方である」という公式を、われわれは採用することにする。山田小枝訳(1988), pp. 11-12)

*11 現代韓国語には、「動詞語幹-ess(였)-ess(였)-ta(hayss-ess-ta)」のように、一般的に過去を表す形式とされる「ess」が二つ重なる現象がある。本稿では、「hayss-ess-ta」形について、アスペクトを表す「ess」に、テンスの「ess」が接続していると考えている。

*12 本稿では日韓両言語に対する対照を主な目的とするため、「テクスト的機能(複数の出来事間の時間関係)=タクシス」に関しては言及しない。「テクスト的機能」も考え合わせると、「アスペクトは、他の出来事との外的時間関係の中で、運動の内部的な時間的展開の把握の仕方を表す文法的なカテゴリー」として定義できる。

アスペクトについて詳しく述べる前に、「運動の内的な時間的構成をとらえること」とは、前節で述べたテンスとはどう違うのかについて説明する。

1.3.2 テンスとアスペクトの共通点と相違点

ここでは、テンスとアスペクトの共通点及び相違点について簡単に説明する。まず、Comrie(1976)では、以下のように述べている。

(30) Comrie (1976, p.5)

... although both aspect and tense are concerned with time, they are concerned with time in very different ways. As noted above, tense is a deictic category, i.e. locates situations in time, usually with reference to the present moment, though also with reference to other situations. Aspect is not concerned with relating the time of the situation to any other time-point, but rather with the internal temporal constituency of the one situation; one could state the difference as one between situation-internal time (aspect) and situation-external time (tense).

(アスペクトもテンスもともに時間とかかわっているのだが、しかしそのかわり方はまったくことになっている。まえにのべてあるように、テンスは指示的なカテゴリーである。つまり、テンスは、ふつうは現在の瞬間に関係づけることによって、場面を時間のなかに位置づけているのである。もっとも、もうひとつの、べつの場面に関係づけることによって、場面を時間のなかに位置づけることもあるのだが。しかし、アスペクトのほうは、ほかのなんらかの時点に場面の時間に関係づけるようなことはしない。それはむしろひとつの場面の内的な時間構成にかかわっている。このちがいは、場面の内的な時間 situation-internal time(アスペクト)と場面の外的な時間 situation-external time(テンス)とのちがいである、ということができるだろう。山田小枝訳(1988), pp. 14)

Comrie(1976)は、(30)のように「テンスは指示的 deictic なカテゴリーである」と述べているが、Lyons (1977)にも同様な指摘がある。

(31) Lyons (1977, p.705)

The main difference between tense and aspect, ... , is that, whereas tense is a deictic category, which involves an explicit or implicit reference to the time of utterance, aspect is non-deictic.

(テンスとアスペクトの主な違いといえば、テンスは、発話時と、明示的もしくは暗黙の照応関係をもつ「指示的 deictic」なカテゴリーであるのに対し、アスペクトは「非指示的 non-deictic」なカテゴリーであるという点である。安沢)

テンスとアスペクトの共通点と相違点については、(1)(2)と(29)及び(30)(31)をもとにし、以下のようにまとめることができる。

テンスもアスペクトも、ともに「事象(situation/event)の時間性」に関係するという点では共通しているが、その関わり方が異なる。テンスは「事象を時間軸上にある基準時(発話時・参照時)との関係で位置づける」文法的カテゴリーであるのに対して、アスペクトは「(一つの)事象の(内的な)時間的構成(の見方)」を問題にする文法的カテゴリーである。

絶対テンスは、発話時を基準としたものであるという点で「指示的 deictic」であるのに対し、アスペクトは発話時から独立したものであるので「非指示的 non-deictic」である。^{*13}

以上では、テンスもアスペクトも、ともに「事象(situation/event)の時間性」に関係するという点では共通すると述べたが、ここでいう「時間性をもったものとしての事象(内的な局面として分割できる事象)」は、主に動詞の表す事象であるので、テンスおよびアスペクト(特にアスペクト)は一般的に動詞(を中心とする言語表現)に関わるものであるのが普通である。

1.3.3 完成相と継続相

一般的にアスペクトには「完成相」と「継続相」という二つの相があるとされているが、「完成相」と「継続相」について説明する。まず、現代日本語の

*13 Comrie(1976)にも指摘されているように、英語の分詞構文(participial construction)などに含まれる非定形(nonfinite)の動詞形は、相対テンス(relative tense)をもち、相対テンスは deictic ではなく non-deictic なるものであるため、それを考えればテンスが deictic で、アスペクトが non-deictic であるという二分法的な特徴づけは必ずしも成立しなくなる(次の例を参照):

Walking down the street, I often meet/met Harry.

Having finished my homework, I don't/didn't need to stay home.

例を見られたい。^{*14}

(32) 今、友達と酒を飲んでいる。

(33)a 明日、友達と酒を飲む。

b 明日の今頃、友達と飲んでいる。

(34)a 昨日、友達と酒を飲んだ。

b 昨日の今頃、友達と酒を飲んでいた。

「飲む」という動詞が表す運動は、「(開始前→)開始→継続→終了(→終了後)」という内的な局面(phase)として分割することができる(このような内的局面によって構成される)。

(32)や(33)bと(34)bの「飲んでいる」「飲んでいた」は、いずれも「飲む」という運動が既に始まっているがまだ終わっていない(開始限界達成から終了限界までの間)こととして一言い換えれば、継続中の運動として一とらえている。これに対し、(33)aと(34)aでは、継続性が無視され、「飲む」という運動の始まりから終わり(開始限界達成から終了限界達成)までを、内的な局面として分割することなく「ひとまとまりの運動」として一いわば点的な運動として一とらえている。

このように、現代日本語の「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」は、運動を「ひとまとまりの運動としてとらえる」か、「継続中という内的な局面としてとらえる」という対立を示す。

奥田(1978a,b)では、現代日本語の(32)(33)(34)などに見られる「スル」と「シテイル」という形態的対立に着目し、「スル(シタ)」を「完成相」と名付け、「シテイル(シテイタ)」を「継続相」と名付けている。奥田(1978a,b)によると、「スル(シタ)」には、「ひとまとまりの運動を表す=完成相」という共通した意味があり、「シテイル(シテイタ)」には、「継続中の中にある運動を表す=継続相」という共通した意味があるということになる。^{*15} 本稿では、基本的に、奥田(1978a,b)の規定に従う。

*14 「完成相」と「継続相」については、奥田(1978a,b)、奥田(1993)、工藤(1995)を参考にしている。

*15 奥田(1978a,b)では、「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」という形態的対立をもって、アスペクトと考える。したがって、「状態動詞(「スル(シタ)」という形態だけしかない動詞)及び「そびえる」等の「シテイル(シテイタ)」という形態だけしかない動詞)」については考察の対象外としている。

Comrie(1976)は、英語の(35)について、次のように述べている。

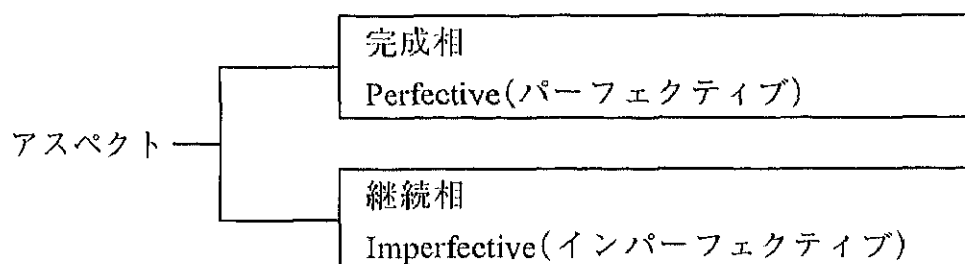
(35) John was reading when I entered.

やや長くなるが「完成相」と「継続相」の概念を理解するのに重要な手がかりになると思われるのでそのまま引用する(ただし、英語の原文は省略する)。

(36) …(前略)…、最初の動詞は、ある出来事 event の背景をさしだして、出来事そのものは第二の動詞によってみちびかれている。第二の動詞は場面(ここでは、私が部屋にはいること)をまるごとさしだして、その内的な時間構成にはふれていない。場面の全体は、分析のできない、ただひとつの全体としてさしだされていて、その場面を構成する、はじめ・なか・おわりという局面 phase はひとつにまとめられている。つまり、「はいる」という動作をつくりあげている、いちいちの局面に場面を分割しようという、ころみはなされていないのである。この意味をになう動詞の形式は、完結相 perfective の意味をもつといわれる。問題になっている言語に、この意味をあらわすための、とくべつの動詞の形式があれば、この言語は完結相のアスペクト perfective aspect をもっているということになる。もうひとつの形式(imperfective: 安による注)、すなわちジョンが読書しているという場面をのべている形式は、このようなし方で場面をさしだしていない。あからさまに場面の内的な時間構成にたちいっている。まえの例において、とくにジョンの読書のまんなかの部分はのべられているが、彼の読書のはじまりの部分とおわりの部分にはっきりふれているわけではない。このようなことから、まえにあげた文は、私がはいったのは、ジョンが本をよんでいる時間帯におきた出来事である、と解釈される。つまり、ジョンが本をよむという動作は、私がはいっていくまえからおこなわれていたし、そのあとにもつづけられたという意味をもっている。完結相と不完結相との意味のちがいは、つぎのように説明できる。完結相は、場面を外がわからながめて、その内部構造を区別だてするということはけっしてしない。それにたいして、不完結相は場面を内がわからながめて、その内部構造に密接にかかわる。こういうふうにいえるのは、不完結相は場面のはじまりをふりかえってみることもできるし、そのおわりをみとおすこともできるから

である。そして、また、もし場面がはじまりもおわりももたずに、全時間をとおしてつづいているとすれば、その場面にもあてはめることができるからである。(山田小枝訳(1988), pp. 12-13.)

Comrie(1976)の(36)の記述内容から分かるように、奥田(1978a,b)における完成相と継続相に関する概念規定と、Perfective と Imperfective に関する概念規定がほぼ一致していることがよく分かる。奥田(1978a,b)や Comrie(1976)の記述内容をまとめてみると、次のようになる。^{*16}



次は、「継続相」について補足する。まず、現代日本語の「シテイル」には、概ね以下の用法があるとされている。^{*17}

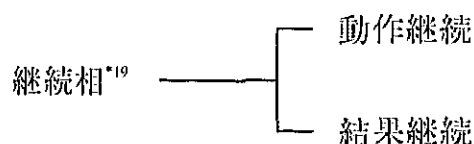
- (37)a 太郎が今、友達と酒を飲んでいる。(動作継続)
- b 二階の窓が開いている。(結果継続)
- c (殺害された)被害者は昼食にラーメンを食べている。(経験・記録)
- d 太郎は、毎日、酒を飲んでいる。(反復・習慣)
- e 太郎はお父さんに似ている。(単なる状態)

(37)c と(37)d 及び(37)e の用法については、(37)a と(37)b の基本的な用法から派生した用法(「スル」との対立が弱まった用法もしくは「スル」との対立がなくなった用法—非アクチュアルな用法)として考える。

^{*16} Comrie(1976)では、Imperfective(不完成相)をさらに「習慣相(Habitual)」と「継続相(Continuous)」に下位分類している。奥田(1978a,b)の「継続相」には「習慣相」が含まれないため、厳密には、奥田(1978a,b)の「継続相」と Comrie(1976)の Imperfective は、その概念規定が完全に一致するわけではない。「習慣相」という用語は、山田(1988)からの引用である。

^{*17} 「シテイル」の意味については、金田一(1950)、藤井(1966)、吉川(1973)などを参考にしている。

(37)a と(37)b のような、基本的な(アクチュアルな)用法について考えてみると、「シテイル」は「動作継続」を表すか「変化後の結果継続」を表すか、という違いはあるものの、「継続」を表している点においては同様である。両者は「継続」という点で一つであって、何の継続かで異なっている。「継続相」には、以下のように二つのバリエーションがある。^{*18}



継続相における二つのバリエーション(動作継続と結果継続)をもたらす要因は、アスペクト形式に上接する動詞の語彙的な意味—正確には、個々の動詞の意味に共通するカテゴリーカルな意味—である。この観点から、現代日本語のスルとシテイルの対立をもつ動詞は、大きく二つのグループに分けることができる。

(38) —「動き動詞」^{*20}

「歩く、泣く、食べる、読む、飲む、開ける、閉める…など」

—「変化動詞」

「開く、死ぬ、消える、太る、割れる、行く、出る、…など」

一般的な傾向として言えば、(39)のような「動き動詞」の「シテイル」形は「動作継続」を表すが、(40)のような「変化動詞」の「シテイル」形は「結果継続」を表す。

(39)a 太郎が廊下を歩いている。 (動作継続)

b 廊下で泣いている。 (動作継続)

*18 「シテイル」に関する「基本的用法」「派生的用法」という用語は、工藤(1982)の名称にしたがっている。

*19 Comrie(1976)は、「継続相 Continuous」を「進行相 progressive」と「非進行相 Non-progressive」とに分けている。「(非)進行相」という用語は、山田(1988)からの引用である。

*20 「動き動詞」「変化動詞」「運動動詞」という用語は、鈴木(1979)の名称にしたがう。鈴木(1979)は、「動き動詞」であれ「変化動詞」であれ、運動を表すという側面では共通する、といており、動き動詞と変化動詞をまとめて「運動動詞」としている。

- (40)a 道端に野良猫が死んでいる。(結果継続)
 b 花瓶が割れている。(結果継続)

しかし、これは絶対的な基準ではなく、一定の構文的な条件の下では「動き動詞」の「シテイル」形が「結果継続」を表したり、「変化動詞」の「シテイル」形が「動作継続」を表すことが可能である。^{*21} 具体的な用例は以下のようである。

- (41)a 昨日行ったけれど雨戸を閉めていましたよ。(結果継続)^{*22}
 b 節子は糸屑を落としてなくしていた。(結果継続)
 c 火焰が空を染めていた。(結果継続)
 d 三四郎は懷に三十円入れている。(結果継続)
 e 一方のトラックは川砂をいっぱい積んでいた。(結果継続)
 f 豆の様子じゃ、十里位あるいているよ。(結果継続)
 g 雨はすっかり肌着まで通っている。(結果継続)
 (42)a 紀子の新しい家が着々できあがっている。(動作継続)^{*23}
 b 気がつくときよるよる彼女が立ち上がっている。(動作継続)
 c 豆が鍋で煮えている。(動作継続)
 d 十人ばかりの子供が大川の土手をガヤガヤ学校から帰っていた。(動作継続)
 e この船は佐渡の方へ戻ってるんじゃないか。(動作継続)
 f 驚くほどの混雑で、ホームの人達はみんな窓から列車に乗り込んでいる。(動作継続)

(41)は、「動き動詞」の「シテイル」構文が結果継続を表す例であり、(42)は、「変化動詞」の「シテイル」構文が動作継続を表す例である。

(41)と(42)から、次のようにまとめることができる。動き動詞であれ、変化動詞であれ、「シテイル」形が動きや変化過程の中の局面をとらえれば、動作継続を表すことになる。一方、動きや変化終了後の結果の局面をとらえれば、結果継続を表すことになる。

*21 詳しい構文的条件に関しては、工藤(1982)を参照されたい。

*22 (41)は、工藤(1982)からの再掲である。

*23 (42)は、工藤(1982)からの再掲である。

以上の内容をまとめてみると、次のようになる。

「継続相」には、「動作継続」と「結果継続」という二つのバリエーションがある。「動作継続」は、運動の開始限界達成後から終了限界までの局面をとらえるのに対し、「結果継続」は、運動の終了限界達成後の状態をとらえる。「シテイル」構文の場合、動作継続を表すか、結果継続を表すかは、一般的には上接する動詞のアスペクトクラスによって決まるが、一定の構文的条件の下では逆になる場合もある。

次は、「完成相」について補足する。まず、現代日本語の「スル」には、概ね以下の用法があるとされている。

- | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|
| (43)a | 友達とビールを <u>飲む</u> (<u>飲んだ</u>)。 | (完成性) |
| b | 父は毎晩、 <u>飲む</u> 。 | (習慣) |
| c | 鳥は <u>なく</u> 。虎は <u>ほえる</u> 。 | (属性) |
| d | 水は 100℃で <u>沸騰する</u> 。 | (属性) |

(43)b と (43)c,d は、(43)a の基本的な用法から派生した用法(「シテイル」との対立が弱まった用法、もしくは「シテイル」との対立がなくなった用法—非アクチュアルな用法)として考える。

(43)a の基本的な用法についてみると、「スル」は、動き・変化の過程の継続性、あるいは、変化後の状態の継続性には無関心に、運動をひとまとまり(開始限界達成後から終了限界達成までを内的な局面として分割することなくひとまとまりの運動)としてとらえる。

- | | |
|-------|---------------------|
| (44)a | 太郎が廊下を <u>歩く</u> 。 |
| b | 廊下で <u>泣く</u> 。 |
| (45)a | 道端で野良猫が <u>死ぬ</u> 。 |
| b | 花瓶が <u>割れる</u> 。 |

継続相の場合は、(39)と(40)で見たように動作の局面であるか、結果の局面であるかということが(絶対的な基準ではないが)重要な意味をもつ。しかし、完成相のアスペクト的意味の現れ方にとっては、動作の局面であるか、結果の局面であるかということはそれほど重要ではない。(44)(45)から分かるよう

に、例えば、「歩く」「泣く」という動きであろうが、「死ぬ」「割れる」という変化であろうが、それはともに運動である。運動動詞の完成相は、運動の開始限界達成から終了限界達成までの全体をひとまとまりとして表す。

ここまで、「ひとまとまり性」「(開始・終了)限界達成性」という用語については無定義のまま使っているが、これらの概念には注意すべき点がある。

(46) 工藤(1995, p. 80)

＜ひとまとまり性＞ 運動(動作、変化)の成立＝開始限界から終了限界までを全一的にとらえる

＜限界達成性＞ 開始の時間的限界か終了の時間的限界のどちらかのみをとらえる

開始限界達成性：動作の成立＝開始限界をとらえる

終了限界達成性：変化の終了(結果の成立)限界をとらえる

(46)の内容に関して問題になるのは、「ひとまとまり性」と「限界達成性」の関係である。工藤(1995)にも同様な指摘があるように、「ひとまとまり性」と「開始限界達成性」、「ひとまとまり性」と「終了限界達成性」は、必ずしも相互排他的であるわけではない。

(47) (実況放送などで)一塁ランナー、走りました。

(47)のような文脈(二塁への盗塁を試み、走り出した場面)では、「走る」という動作が終了しているわけではない。(47)は、「走る」という動作を「走り始めた(開始限界達成後の)」局面から「走り終わった(終了限界達成の)」局面までをひとまとまり(工藤(1995)の表現では、全一的)としてとらえておらず、「走る」という動作が成立した(開始限界が達成した)ことを表す。

(48) 時計が二時に止まった。

(49) 時計が二時から三時まで止まった。

(48)における「二時」という時間成分は「終了限界が達成した時点」を指している。これに対し、(49)における「二時から三時まで」という時間成分は開始限界から終了限界までの期間を表す。このことから、(48)については、終了

限界達成を表している。または、(49)と同様に、開始限界から終了限界までをひとまとまりとして表しているとも考えられる。

完成相についてまとめてみると、次のようになる。

完成相には、このように三つもバリエーション(工藤(1995)によると、開始限界達成性・終了限界達成性・ひとまとまり性)が考えられるが、いずれも「限界達成」をとらえていることにはかわりはない。「スル」形の場合は、一般的に、上接する動詞が動き動詞であれ、変化動詞であれ、運動動詞の完成相は、運動の開始限界達成から終了限界達成までの全体をひとまとまりとして表す。

1.4. 現代日本語におけるアスペクトを表す形式

現代日本語の場合は、状態動詞を除いて、「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」という形でアスペクトを表す。現代日本語の「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」は、以下に示すような基本的テンス・アスペクト体系をなしている。

(50)

アスペクト テンス	完成相	継続相
	スル	シテイル
非過去		
過去	シタ	シテイタ

また、前述したように「シタ」と「シテイル(シテイタ)」には、パーフェクトを表す用法がある。次の例を見られたい。

(51) 私は、家内と三十歳の時に結婚しています。 ((12)の再掲)

(52) この一年で随分、家がふえましたねえ。 ((13)の再掲)

この他に、「シテイル(シテイタ)」には、「単純状態」や「繰り返し(反復相)」を表す「非アクチュアルな用法」がある。

(53) 太郎はお父さんに似ている。 (単純状態)

(54) 僕は、一年前からこの薬を飲んでいる。 (繰り返し)

現代日本語のアスペクト形式は、次のようにまとめることができる。

形 式	意 味
「スル」	完成相(非過去)
「シタ」	完成相(過去)・パーフェクト(現在)
「シテイル」	継続相(非過去)・パーフェクト(現在・未来)
「シテイタ」	継続相(過去)・パーフェクト(過去)

非アクチュアルな用法：単純状態(「シテイル」)

繰り返し(「スル」「シテイル(シテイタ)」)

(「繰り返し」については、(71)を見られたい。)

1.5. 現代韓国語におけるアスペクトを表す形式

1.5.1 継続性を表す形式

- (55) 다로는 자고 있다(자고 있었다).

talo-nun ca -ko iss -ta(ca -ko iss -ess-ta)

太郎は 眠る テイル (眠るテイル タ)

太郎は眠っている(眠っていた)。

- (56) 다로는 친구와 술을 마시고 있다(마시고 있었다).

talo-nun chinkwu-wa swul-ul masi-ko iss-ta(masi -ko -iss -ess-ta)

太郎は 友達 と 酒 を飲むテイル (飲む テイル タ)

太郎は友達と酒を飲んでいる(飲んでいた)。

- (57) 다로는 지금도 잔다.

talo-nun cikum-to ca-n-ta

太郎は 今 も 眠る

太郎は今も眠っている。

- (58) 다로는 지금도 친구와 술을 마신다.

talo-nun cikum-to chinkwu-wa swul-ul masi-n-ta

太郎は 今 も 友達 と 酒 を飲む

太郎は今も友達と酒を飲んでいる。

- (59) 병이 깨져 있다(깨져 있었다).

pyeng-i kkaycye iss -ta (kkaycye iss -ess-ta)

瓶 が割れるテイル (割れるテイルタ)

瓶が割れている(瓶が割れていた)。

(60) 고양이 죽어 있다(죽어 있었다).

koyangi-ka cwuk -e iss -ta(cwuk-e iss -ess-ta)

猫 が死ぬ テイル (死ぬ テイルタ)

猫が死んでいる(死んでいた)。

(55)(56)(57)(58)は、動作継続を表し、(59)(60)は、結果継続を表す。再帰的な表現に用いられる(61)(62)の「hako iss-ta(하고 있다)」 「hay iss-ta(해 있다)」については、これらを動作継続と見るか、結果継続と見るか、という問題が残るが、一般的には、(63)のようにまとめることができる。

(61) 다로는 빨간 모자를 쓰고 있다.

talo-nun ppalkan moca-lul ssu -ko iss-ta

太郎は 赤い 帽子を かぶる テイル

太郎は赤い帽子をかぶっている。

(62) 다로는 뒤에 서 있다.

talo-nun twi -ey se -iss-ta(se-e iss-ta>se iss-ta)

太郎は 後ろに立つ テイル

太郎は後ろに立っている。

(63) 継続性を表す「hako iss-ta」 「hay iss-ta」について

動作継続：「hako iss-ta」

結果継続：「hay iss-ta」

現代韓国語では、(57)(58)のように「han-ta(한다)」形(現代日本語の「スル」形にあたる)にも継続性を表す用法がある。

以上の内容をまとめると、現代韓国語における「継続性」を表すアスペクト形式には、次のような三つの形式がある、ということになる。

—「動詞語幹+ ko iss-ta(고 있다)；「hako iss-ta(하고 있다)」」→(55)(56)

—「動詞語幹+ e iss-ta(어 있다)；「hay iss-ta(해 있다)」」→(59)(60)

—「動詞語幹+ nu-ta(는다)；「han-ta(한다)」」→(57)(58)

このうち、「hako iss-ta」と「hay iss-ta」は、現代日本語の「シテイル」に相当する形式であり、「han-ta」は、現代日本語の「スル」に相当する。

なお、これらの形式に関する具体的な意味・用法などに関する記述は、第二章以降に行うことにする。

1.5.2 完成性を表す形式

(64)a 나는 내일 친구와 술을 마신다.

na-nun nayil chinkwu-wa swul-ul masi-n-ta

僕は 明日 友達 と 酒 を 飲む

僕は明日、友達と酒を飲む。

b 다로는 어제 친구와 술을 마셨다.

talo-nun ecey chinkwu-wa swul-ul masye-ss-ta

太郎は 昨日 友達 と 酒 を 飲む タ

太郎は昨日友達と酒を飲んだ。

(65)a A는 무모하게 이로 호두를 깎는다.

A-nun mwumohakey i -lo hotwu-lul kkay-n-ta

A は 無謀に 歯で 胡桃 を 割る

Aは無謀にも歯で胡桃を割る。

b A는 손으로 호두를 깎았다.

A-nun son-ulo hotwu-lul kkay-ss-ta

A は 手で 胡桃 を 割るタ

Aは手で胡桃を割った。

(66)a 나는 오늘 밤 한국호텔에 묵는다.

na-nun onul pam hankwukhotheyl-ey mwuk-nun-ta

僕は 今晚 韓国 ホテル に泊まる

僕は今晚韓国ホテルに泊まる。

b 나는 어제 한국호텔에 묵었다.

na-nun ecey hankwukhotheyl-ey mwuk-ess-ta

僕は 昨日韓国 ホテル に泊まるタ

僕は昨日、韓国ホテルに泊まった。

現代韓国語には、(64)(65)(66)のように「han-ta(한다)」形で完成性を表す用法がある。「han-ta」は、非過去を表し、「hayss-ta(했다)」は、過去を表す。

1.5.3 単純状態を表す「hayss-ta」

- (67) 다로는 아버지를 닮았다. ((17)の再掲)

talo-nun apeci -lul talm-ass-ta

太郎は お父さん を似るタ

太郎はお父さんに似ている。

- (68) A는 팔이 약간 휘었다. ((18)の再掲)

A-nun phal-i yakkan hwi -ess-ta

Aは 腕 が 少し 曲がる タ

Aは腕が少し曲がっている。

現代韓国語では、(67)(68)のように「hayss-ta(했다)」形で、単純状態を表す場合がある。これらの表現については、第四章で詳しく述べる。

1.5.4 いわゆる「完了」を表す「hayss-ta」

- (69) 나는 아내와 서른살에 결혼했습니다. ((15)の再掲)

na-nun anay-wa selunsal-ey kyelhonhay-ss-supnita

僕は 家内 と 30 歳 に 結婚する タ丁寧

僕は家内と 30 歳の時に結婚しています。

- (70) 대진표를 보니 이번 대회는 우리가 우승했다.

taycinphyo-lul po -ni ipen tayhoy-nun wuli-ka wusunghay -ss-ta

対戦表 を 見るタラ この大会 は 我々が 優勝 するタ

対戦組み合わせ表を見たら、この大会は我々が優勝したも同然だ。

現代韓国語では、(69)や(70)のように「hayss-ta」形でいわゆる「完了」を表す用法がある。完了については、工藤(1989)にならい、以下では「パーフェクト」と呼ぶことにするが、「パーフェクト」をめぐっては、本章の2.節及び第四章で詳しく述べる。^{*24}

現代韓国語におけるアスペクト形式についてまとめると、次のようになる。

*24 (70)のような「動作パーフェクト(未来)」については、第四章で詳しく述べる((69)は「動作パーフェクト(現在)」である)。

形 式	意 味
「han-ta」	完成性(非過去)・継続性
「hayss-ta」 「hayss-ess-ta」	完成性(過去)・(動作)パーフェクト性 (動作)パーフェクト性(過去)
「hako iss-ta」 「hako iss-ess-ta」	継続性(動作継続)非過去 継続性(動作継続)過去
「hay iss-ta」 「hay iss-ess-ta」	継続性(結果継続)非過去 継続性(結果継続)過去

非アクチュアルな用法：単純状態(「hayss-ta」)

単純状態(過去)：「hayss-ess-ta(했었다)」

上記の図には、(71)のような「繰り返し(反復性)」を表す「hayss-ta(했다)」や「hako iss-ta(하고 있다)」 「hay iss-ta(해 있다)」が含まれていない。本稿では、「繰り返し(反復性)」については取りあげないことにする。その理由は、「繰り返し(反復性)」は、単一運動の内的時間構成について問題にしているのではないため、本稿で注目している「存在動詞の文法化」とは関連づけることが難しいからである。今後の課題にしたい。

(71) a 나는 작년부터 이 약을 먹고 있다.

na-nun caknyen-pwuthe i yak-ul mek -ko iss-ta

僕は 昨年 から この薬 を食べるテイル

僕は昨年からこの薬を飲んでいる。

b 나는 작년부터 이 약을 먹었다.

na-nun caknyen-pwuthe i yak-ul mek -ess-ta

僕は 昨年 から この薬 を食べるタ

僕は昨年からこの薬を飲んでいる(現在も飲んでいる)。

2. 「パーフェクト」について

現代日本語の「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」は、一般的に、以下に示すようなテンス・アスペクト体系をなしているとされる。

(50)

アスペクト テンス	完成相	継続相
	スル	シテイル
非過去	スル	シテイル
過 去	シタ	シテイタ

上記の図のように、現代日本語の「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」によって表現される「完成相—継続相」の対立が、現代日本語のもっとも基本的なアスペクト対立である。

しかし、「スル(シタ)」と「シテイル(シテイタ)」という形式が表すアスペクト的意味は、「完成性」「継続性」という基本的な意味で全部というわけではない。以下の「シタ」形の例を見られたい。

(72)a 夕飯、食べた？

b もう食べた。 / まだ食べていない。

(73)a 昨日、夕飯食べた？

b うん、食べた。 / いいえ、食べなかった。

寺村(1971)では、(72)bのような「シタ」について、(73)bのような「(絶対テンス)過去を表すシタ」と区別し「完了のシタ」としている。

(74)a 夕ご飯、もう食べている？

b うん、食べた。 / いや、まだ、食べていない。

寺村(1971)によると、(72)bの「シタ」は、(73)bの「シタ」とアスペクト的な意味において異なる。寺村(1971)は、それぞれの文の否定形式との対応関係を見た時に、(72)の「シタ」の対応は、(74)の「シテイル」の対応と同一であるのに対し、(73)の「シタ」とは異なることから明らかである、と主張する。

寺村(1971)がいわゆる「完了のシタ」として区別している「シタ」については、後に、鈴木(1979)によって「ペルフェクト的な過去」として改められることになる。²⁵ 鈴木(1979)では、もし(72)bの「もう食べた」の「シタ」がアスペクト(完了)を表しているとする、この文はテンスのない文になってしまう、と指摘している。テンスがないということは、述語の表す事態を時間軸上にアクチュアルな事態として位置づけられないことになるが、これは事実反するとしている。なお、寺村のいう「過去のシタ」を「アオリスト的な過去」とし、「完了のシタ」を前述したように「ペルフェクト的な過去」と区別して

*25 高橋(1985)に、寺村(1971)と鈴木(1979)の議論に関するまとめがある。

いる。本稿は、基本的に、「アオリスト的な過去」と「ペルフェクト的な過去」とに区別する鈴木(1979)の考え方にしたがっている。

次に、以下のような「シテイル」形の例文を見られたい。

(75) この本は、一年前に読んでいる。

(76) 父は、もう十二年も前に死んでいる。

(77) (変死体の死因について)この被害者は、砒素を飲んでいる。

(75)(76)や(77)の「シテイル」の場合は、いわゆる「経験・記録」の意味を表す。これらの「シテイル」は、基準時において当該の事象が継続している、という継続相を表すわけではない(つまり当該の事象の内的な時間関係をとらえているわけではない)。

以下では、鈴木(1979)でいう「ペルフェクト的な過去」を表す「シタ」と(75)(76)や(77)の「シテイル」について詳しく説明する。以下では、これらの「シタ」や「シテイル」の用法を、工藤(1989)にしたがい「パーフェクト」と呼ぶことにする。

2.1. 「パーフェクト」の定義

Comrie(1976)は、「パーフェクト」を次のように規定している。

(78) Comrie(1976, p. 12)

In this book, the terms 'perfect' and 'perfective' are used in very different senses from one another. The term 'perfective' contrasts with 'imperfective', and denotes a situation viewed in its entirety, without regard to internal temporal constituency; the term 'perfect' refers to a past situation which has present relevance, for instance the present result of a past event (*his arm has been broken*).

(この本では、'パーフェクト perfect' と '完結相 perfective' という用語は、たがいにことなる意味でもちいている。'完結相' という用語は、'不完結相 imperfective' という用語の反対物であって、内的な時間構成とは無関係に、ひとまとまりのものとしてとらえられる場面をさししめす。'パーフェクト' という用語は、現在に関係のある過去の場面、つま

り過去の出来事の結果が現在にのこっていることをいいあらわす (*his arm has been broken* —彼の腕はおれている。)(山田小枝訳(1988) p. 25)
(79) Comrie(1976, p. 52)

… The perfect is rather different from these aspects, since it tells us nothing directly about the situation in itself, but rather relates some state to a preceding situation. …(中略)… More generally, the perfect indicates the continuing present relevance of a past situation.

(パーフェクトは、このアスペクト(場面の内的な時間構成をさしだす、さまざまな仕方としてのアスペクト：安による注)とはかなりことなっている。なぜなら、パーフェクトは場面そのものについては直接的にはなんらかたらないからである。むしろ、ある状態を先行する場面と関係づけているのである。…より一般的に言えば、パーフェクトは、ある過去の場面がひきつづき現在にまでかかわってくることをしめしているのである。)(山田小枝訳(1988) p. 83)

Comrie(1976)の(78)と(79)のような記述から、「パーフェクト」は、「事象の内的な時間的展開(山田の訳語では「時間構成」)の把握のしかた」に関わる文法的な範疇として規定される「アスペクト」とは異質的な存在であることが分かる。「パーフェクト」は、事象の内的な時間的展開を問題にしているのではなく、ある事象の実現した後に存在する状況を、その「外的な局面」として問題にしているのである。

「His arm has been broken (彼の腕はおれている)」について付言してみると、この表現は、先行する(過去の)「腕がおれる」という事象によってもたらされた結果状態(腕がおれた結果状態)、特に現在での結果状態を表している。「腕がおれる」という出来事自体は、既に発話時よりも先行して起きている。この意味でこの表現は、「腕がおれる」という事象の内的な時間構成について言及しているわけではない。「腕がおれる」という事象が実現した後に生じた結果状態を、現在と関係づけて—外的な局面として—表現している。

工藤(1995)は「(動作)パーフェクト」について以下のように定義している。

(80) (工藤(1985, pp. 96-99))

(以下に示した例に見られる)「シテイル(シテイタ)」の意味は、基本的意味(継続性)に対し、<ある設定された時点において、それより前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること>を表していると規定することができる。

- ①発話時点、出来事時点とは異なる＜設定時点＞が常にあること。
- ②設定時点にたいして出来事時が先行することが表されていて、テンスの要素としての＜先行性＞を含んでいること。
- ③しかし、単なる＜先行性＞ではなく、先行して起こった運動が設定時点とむすびつき＝関連性をもっているにとらえられていること。つまり、運動自体の＜完成性＞とともに、その運動が実現した後の＜効力＞も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っていること。

工藤(1995)では、「パーフェクト」の下位分類として、「未来パーフェクト」「現在パーフェクト」「過去パーフェクト」の区別を認める。

＜未来パーフェクト＞

あなたが家庭をもつ頃には、わたしはもうとっくに死んでいるわよ。
(* もう死んだ)

＜現在パーフェクト＞

私の父は、ガンで、もう死んでいます。(＝もう死にました)
(「シタ」も「現在パーフェクト」を表すことができる。「シタ」形の未来・過去パーフェクトは成立しない。)

＜過去パーフェクト＞

私が帰郷した時には、父は既に3時間まえに死んでいた。
(* 既に死んだ)

しかし、工藤(1995)では、「パーフェクト」を「動作パーフェクト」と「状態パーフェクト」に分けているため、注意が必要である。「動作パーフェクト」と「状態パーフェクト(本稿では、結果継続を表す継続相と呼んでいる)」の違いについては、次のように述べている。

- (81) ①結果をもたらす先行した運動を直接とらえているか否か
- ②運動の必然的な直接的な結果か、偶然的な間接的な結果か
- ③結果の継続＝顕在性を全面にだしてとらえているか否か
- (82)a 信長は本能寺で死んでいる。 「動作パーフェクト」
- b 堀の下にミミズが死んでいる。 「状態パーフェクト(結果状態)」

(82)a は、「信長の死亡」という運動について直接的に言及している。これに対し、(82)b は、目の前にある結果状態を直接にとらえているが、その結果

状態をもたらした運動については、直接的に触れていない。また、(82)a は、「本能寺」に「信長の死骸」がなくてもかまわないのに対し、(82)b は、そうではない((82)b は、結果の継続＝顕在性を全面にだしてとらえている)。

(83)a (顔が赤くなっている人に)

また飲んでいるでしょう。 「動作パーフェクト」

b あ、ガラスが割れている。 「状態パーフェクト(結果状態)」

(83)a については、「酒を飲むと必ず顔が赤くなる」ということはあり得ない(別にいくら飲んでも赤くならない人もあり得る)ので、偶然的な間接的な結果といえるのに対し、(83)b は必然的な直接的な結果であるといえる。

以上では、Comrie(1976)と工藤(1989)・工藤(1995)を取りあげ、「パーフェクト」について述べたが、まとめてみると、次のように定義する。

「パーフェクト」は、「事象の内的な時間的展開の把握のしかた」に関わる文法的な範疇として規定される「アスペクト」とは異なって、ある事象の実現した後に存在する状況を、その「外的な局面」として問題にする。「外的な局面として問題にする」というのは、本章の冒頭で言及した「参照時テンス」と関連づけて言えば、出来事時と設定時との外的関係(出来事時が設定時より先行する)を問題にする、ということである。

「パーフェクト」が出来事時と設定時との外的関係をとらえるという面において「完成性」と区別される。なお、結果継続とは(81)のような面において違いがある。^{*26}

2.2. 「パーフェクト相」

「パーフェクト」をアスペクトのバリエーションの一つとして、つまり「パーフェクト相」として認めるためには、アスペクトの定義を改める必要がある。前述したように、「パーフェクト」は「事象の内的な時間的展開の把握のしかた」とは異なるためである。このような問題があるということを認識した上で、本稿では、「パーフェクト」については、(84)のように、アスペクトのバリエーションの一つとしてとらえることにする。

*26 工藤(1989)では、「パーフェクト」を「ひとまとまり性(完成相)」と「結果継続性(継続相)」の中間に位置づけられるとしている。(p. 89)

(84) 現代日本語

アスペクト テンス	完成相	継続相	パーフェクト相
	テンス	アスペクト	相
未 来	スル	シテイル	シテイル
現 在	—	シテイル	シテイル シタ
過 去	シタ	シテイタ	シテイタ

工藤(1995), p. 161(ただし、一部省略している)

現代韓国語については、現代日本語との対照のために「パーフェクト相」をアスペクトのバリエーションとして認めた上で、テンス・アスペクト全体の体系を考えると、次のようになるだろう。

(85) 現代韓国語

アスペクト テンス	完成性	継続性	パーフェクト性
	テンス	アスペクト	性
未 来	「han-ta」	「hako iss-ta」 「hay iss-ta」	(「hako iss-ta」) (「hay iss-ta」) 「hayss-ta」
現 在	—	「han-ta」 「hako iss-ta」 「hay iss-ta」	「hayss-ta」
過 去	「hayss-ta」	「hako iss-ess-ta」 「hay iss-ess-ta」	(「hako iss-ess-ta」) (「hay iss-ess-ta」) 「hayss-ess-ta」

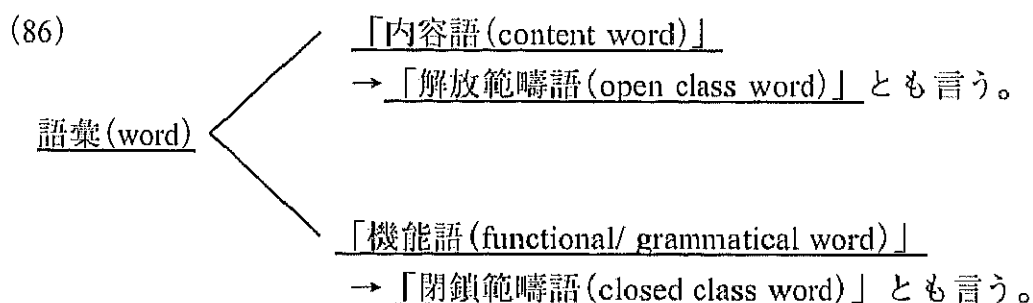
本稿では、「パーフェクト相」に関して、「パーフェクト相現在」だけを研究対象とする。ここでは、問題を一本化し、現代日本語の「パーフェクト現在」は「シテイル」形(存在型アスペクト形式)で表すことが可能であるのに対し、現代韓国語の場合は、「パーフェクト現在」を「hako iss-ta(하고 있다)」形や「hay iss-ta(해 있다)」形(存在型アスペクト形式)で表現することができない、という両言語間に見られる、もっとも顕著な違いと思われる現象について、その理由を究明するためである。

「パーフェクト未来」「パーフェクト過去」については、ここでは言及しない。現代韓国語におけるそれぞれに対応する表現は、基本的には、存在型アスペクト形式で表すことができない。しかし、(85)では括弧として示したように、一部ではあるが、「hako iss-ta」形や「hay iss-ta」形の存在型アスペクト形式で表せる表現が見られる等、現時点ではまだ不明な点が多く、両言語を均質的にとらえ、対照することが困難である。今後の課題にしたい。^{*27}

2.3. 「文法化(grammaticalization, grammaticization)」とは何か

本稿で用いる「文法化」という概念については、以下のように定義する。

「語彙(word)」は、大きく分けて(86)のように分類することが可能である。



(87)a 太郎は言語学を勉強している。

b 다로는 언어학을 공부하고 있다.

talo-nun enehak-ul kongpwuha-ko iss-ta

太郎は 言語学を 勉強する テイル

太郎は言語学を勉強している。

(88)a 内容語→「太郎」「talo(다로)」 「言語学」「enehak(언어학)」

「勉強する」「kongpwuha-ta(공부하다)」

b 機能語→「は」「nun(는)」 「を」「ul/lul(을/를)」 「ている」

「ko iss(고 있다)」

例えば、(87)のような文を構成している各々の要素については、(88)のように分類することが可能である。(88)a の名詞・動詞などのような、認識世界に存在するもの・事柄や、出来事などを表す内容語と、(88)b のような、もっぱら文法関係や時制、モダリティ等の文法的意味を表す機能語に分けられる。な

*27 現代韓国語の「パーフェクト未来」を「hayss-ta」形で表すことができる、という点は、現代日本語とは異なる。この問題については、第四章を参照されたい。

お、(88)の両者は、まったく無関係に存在するのではなく、内容語と機能語が明らかに派生関係を持っていると見せる例が、多くの言語で普通に観察される。また、その派生は、一般的に内容語から機能語へと進むのであり、その逆は極めてまれである(派生の一方向性: unidirectionality)とされる。^{*28}

このような、内容語から機能語への派生を、本稿では文法化と呼ぶ。先行研究では、このような「文法化現象」をめぐって、様々な仮説や原理等によって説明されている。本稿では、文法化が進む過程で、意味、統語的機能、形態の点から観察される、日韓両言語における次のような現象について注目している。次のような例を見られたい。

(89) */??机の上にテレビが壊れている。 [結果継続]

(90) */??台所の入り口の前に母が本を読んでいる。 [動作継続]

(91) 책상 위에 텔레비전이 부서져 있다. [結果継続]

chayksang wi-ey theyleypicen-i pwusecye iss-ta

机の 上に テレビ が壊れるテイル

*/?? 机の上にテレビが壊れている。

(机の上にテレビが壊れた状態で置いてある、という意味である。)

(92) [小説などの地の文で、新しい場面を描写している表現]

부엌 문 앞에 어머니가 책을 읽고 있다. [動作継続]

pwuekh mwun aph-ey emeni-ka chayk-ul ilk -ko iss-ta

台所の ドアの前 に母 が本 を 読むテイル

*/?? 台所のドアの前に母が本を読んでいる。

(台所のドアの前に、母が立った状態で本を読んでいる、という意味である。)

現代日本語のアスペクト形式の一つである「シテイル」形を述語とする構文と、現代韓国語のアスペクト形式の一つである「hako iss-ta(하고 있다)」形や「hay iss-ta(헤 있다)」形を述語とする構文を比べてみると、(89)(90)と(91)(92)に見られるような両言語間の違いがはっきりと分かる。詳しいことについては第三章で述べるが、(89)(90)と(91)(92)に見られる違いについては、次のように説明することができる。

これらの文の述語である「壊れる」「読む」「pwuseci-ta(부서지다)」「ilk-ta

*28 「単一方向性仮説(Unidirectionality Hypothesis)」については、Bybee et al. 1994. を参考にしている(意味: 具体的>抽象的、音韻: 自立的>依存的、範疇: 語彙的>機能的)。

(있다)」の項構造には、存在場所を表す「二格」名詞句、もしくは「ey(에)格」名詞句が含まれない。このように言える根拠は、これらの文の述語を「シタ」形や「hayss-ta(했다)」形にすると成立しない文になってしまう点があげられる。現代韓国語の(91)(92)において「ey(에)格」名詞句を共起可能にするのは、「iss-ta(있다)」が「ey 格」名詞句を要求している(統語的な機能)と見るのが妥当であろう。それでは、なぜ現代韓国語は、このようなことが可能なのだろうか。本稿では、この違いについては文法化と関連し、次のように考えている。

(91)(92)の現象は、現代韓国語の存在型アスペクト形式に、存在動詞の「iss-ta」の意味・機能が比較的(現代日本語に比べて)強く影響していることを示している。現代日本語の「シテイル」を構成する「イル」は、かなり機能語化が進んでいるため、存在場所を表す「二格」名詞句を共起可能にすることができないのに対し、現代韓国語の「hako iss-ta(하고 있다)」 「hay iss-ta(해 있다)」を構成している「iss-ta」のほうは、現代日本語の「シテイル」「シテアル」を構成する「イル」「アル」に比べて、本来の語義としての特色(内容語としての統語的な特徴)をまだ保っている—内容語から機能語への文法化が相対的に進んでいない(両言語間には文法化の度合いに差がある)—と考える。

なお、以上で述べたような「日韓両言語に見られるアスペクト形式を構成する存在動詞の機能語化(脱範疇化・漂白化)」をめぐっては、次のような理論的な背景に基づいている。

①脱範疇化原理(De-categorization Principle)

脱範疇化とは、内容語が機能語に変わっていく過程において、本来の語彙が持っていた名詞・動詞のような一次的な文法範疇が示す特性(屈折(活用)の形態的特徴や統語的制限)が薄れ、形容詞・分詞・前置詞・後置詞などのような二次的文法範疇の特性を示すようになる文法化の現象のことをいう(一次的な範疇から二次的な範疇への変化)。^{*29}

具体例：(89)(90)と(91)(92)における「イル」「iss-ta」のように「一次的な内容語」の統語的な制約が薄れることによって文法化していく例があげられる。

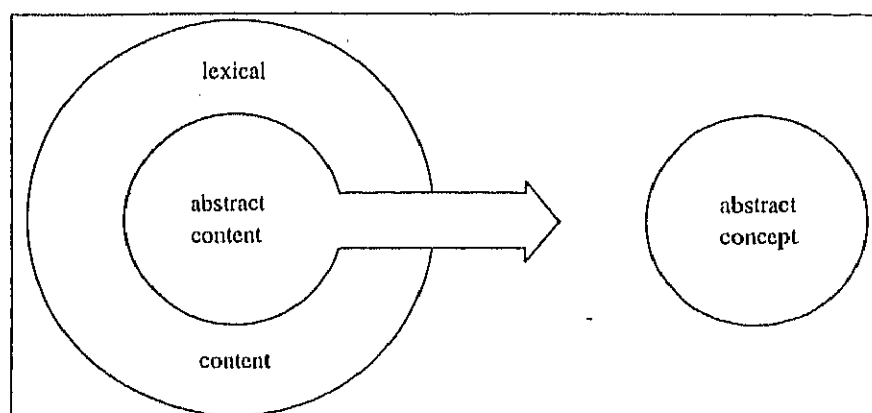
*29 「脱範疇化(De-categorization)」については、Hopper, P. 1991.と Hopper, P. & E. Traugott. 1993. を参考にしている。

②漂白化モデル(The Bleaching Model)^{*30}

「漂白化モデル」は、内容語から機能語への文法化過程において、どのような意味(概念)上の変化が起こり、そのような意味(概念)上の変化はどのように生じるのか、という問題(意味変化)を説明する際に有効なモデルの一つである。

「漂白化モデル」では、(内容語から機能語への)文法化過程においての意味変化は、一般的に、弱化・消失の方向に進んでいくと説明する。つまり、本来の語彙の実質意味が弱まり、抽象化していく、同時に、修飾語や項の選択制限が弱まっていく、ととらえる考え方である。このように「漂白化モデル」では、「(本来の語彙の実質意味が弱まり、抽象化していく)過程」に焦点をおいているのである。以下の<図>を見られたい。

<図>



The Bleaching Model (Heine et al. 1991. p. 109)

<図>から分かるように、本来の語彙の持つ意味は、語彙的な意味—すなわち具体的な概念(実質意味)を失い、抽象的な概念だけが残る、という方向で文法化していく。

*30 「漂白化」という用語は、金水(2001)を参考にしている(p. 15)。なお「漂白化モデル」については、Heine, B. et al. 1991. を参考にしている。「文法化モデル」は、文法化に関する様々な先行研究で、「意味的な変化」について説明しようと提案されているものである。

具体例：現代の日韓両言語は、存在動詞「イル」「アル」・「iss-ta」の実質意味が弱まり、抽象化することによってアスペクト形式になっている。

③語形の縮約(Erosion)原理

語形の縮約とは、内容語が機能語に変わっていく過程において、語形が短縮されたり、前後の語と融合するなど、音韻上の特徴が弱まっていく文法化の現象のことを言う。^{*31}

具体例：

—日韓両言語のアスペクト形式は、次のような存在動詞の形態的な縮約によって成立している。

現代日本語：「テアリ」>「タリ」>「タ」

現代韓国語：「-e is(어 잇)-」>「-eys(엿)-」>「-es(읻)-」>「-ess(읻)-」

—現代日本語は、「シテイル」>「シテル」という縮約形が存在する。これに対し、現代韓国語は、(「hako iss-ta(하고 있다)」>)「* hako-ta(하고다)」や(「hay iss-ta(헤 있다)」>)「* hay-ta(헤다)」という縮約形は存在しない。現代日本語には「シテル」という縮約形があることから、現代韓国語に比べて文法化が相対的に進んでいることが明らかであろう。

3. まとめ

本章では、本稿で用いられる「テンス」「アスペクト」「完成相」「継続相」「パーフェクト(相)」「文法化」について定義を行った。

「テンス」とは、発話時と出来事時の外的関係をとらえる(絶対テンス)、もしくは、発話時と参照時の外的関係(参照時テンス)をとらえる文法的なカテゴリーである。

「アスペクト」とは、運動の内的な時間的構成をとらえる(把握する)仕方を表す文法的なカテゴリーである。「アスペクト」には、「完成相」と「継続相」という二つのバリエーションがある(「パーフェクト相」を入れると三つになる)。

*31 「語形の縮約原理」については、Heine, B. et al. 1991. を参考にしている。(p. 214)

「完成相」は、開始限界達成から終了限界達成までの全体をひとまとまりとして表す。もしくは、開始限界達成か終了限界達成のいずれかをとらえる。(完成性には、開始限界達成性・終了限界達成性・ひとまとまり性の三つのバリエーションがある)

「継続相」は、運動の開始限界達成から終了限界達成までの間(動作継続)か、もしくは、運動の終了限界達成後の結果(結果継続)を表す。

「パーフェクト(相)」は、設定時より先行する事象の実現した後に存在する状況(必然的ではない)を、設定時との外的関係としてとらえる。

「文法化」とは、「内容語から機能語への派生現象」のことである。なお、本稿で具体的に取りあげる日韓両言語のアスペクト形式に見られる「文法化現象」に関する理論的な背景について簡単にまとめた。